

このようなものを、すべて、つくりないうでもらうことは
どうしてそんなにむずかしいことなのでしょうか。ここ
では、その問題を探めて行くだけの紙面の余裕がないの
で、先をいそぎます。

ただひとつ、見過せないことは、多摩川の場合、自然
破壊者は、どこかの開発会社ではなくて、国であり、都
であることです。何もつくってくれなくてよいのに、公
共投資という名目で、都民のためという口実で、公然と
行なわれる自然破壊に私たちはこれからも、きびしいた
たかいを進めて行かなければなりません。

◇会のメンバー

自然保護運動の担い手は、多摩川の場合、自然の好き
な若者たち、自然保護協会や野鳥の会で働いてはいるが
たまの休日には、汽車に乗ったりしなくても行ける多摩
川の川原で草むらに寝ころび、ひばりのさえずりを聞き
ながら過ごしたいと思っている人達と、多摩川のすぐ近
くに住み、多摩川のすばらしさを知り、多摩川なしでは
生活を考えられなくなってしまっている地域住民です。

昭和四十五年八月に起きた「多摩川ぞい自動車道路建

設計画」の発表を契機として、その反対運動を共闘しつ
つ生まれた地域住民と若手専門家との結びつきは、その
後の運動の中でも多くの成果をあげ、自然破壊の歯止め
の一端を果たしてきました。たとえば、コマ切れに舗装
するなどして、開発側が執ように攻撃をしかけるので、
未だに成功したとは言いがたい。「多摩川ぞい自動車
道路」の反対運動のほか、堤防サイクリングコース建設
計画の阻止などもその列です。

◇金の仕事

多摩川の自然の素晴らしさをもっとも多くの都民
や子どもたちに知らせることも、私たちに課せられた大
切な仕事だと思っていいます。より多くの人が自然に親し
み、自然を愛するようになり、自然を守る運動へという
道すじが今の日本には特に必要とされています。このよ
うな理由から、熱心な会員の指導によって、毎月一回、
多摩川のどこかで自然観察会が開かれています。一年間
の観察計画をたてて、「渡り」「群落」「自然のしくみ」

「鳴く虫」などと毎回、テーマを決めて観察会を行なう
ことができるのもそこに豊富な自然が教材として残って